第 130 号　2019 年 9 月 30 日

東日本大震災 復興･支援活動ニュースレター
カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

昨年、福島の各小教区での支援活動の状況をお話しいただくため、年４回のサポート会議のうち、１回を福島県のカトリック野田町教会で開催しました。今年も同様の機会を設けることになり、８月 23 日、第 51 回サポート会議・第 38 回全ベース会議が、福島県南相馬市にあるカトリック原町教会およびカリタス南相馬で行われました。会議前日には、南相馬市周辺の被災地視察も行いましたので、その様子を含めてご紹介します。

また、カトリックいわき教会から、「カリタスいわき（仮称）」の活動についてのご報告がありました。福島県いわき市には、市内で地震・津波の被害を受けた被災者と、原発事故により双葉郡から避難してきた被災者がいます。そのため、他の地域にはない問題や悩みがあり、カトリックいわき教会でも、両者を同じように支援する環境を作ろうと現在、奮闘されているところです。

最後に、東京純心女子高等学校から８月にカリタス南三陸でボランティア活動を行った際の感想が届きましたので、ご紹介します。

第 51 回サポート会議

仙台教区サポートセンター　　濱山　麻子

８月 23 日、福島県南相馬市の原町教会と、敷地内のカリタス南相馬を会場に、第 51 回仙台教区サポート会議が行われました。ふだんは仙台の元寺小路教会で行うことが多いのですが、今回は、被災者支援の活動をしている福島の小教区やグループからのヒアリングの場を設けることになり、会場を移して行いました。

会議に先駆けて、サポート会議の出席者（全国の復興支援活動担当者、復興支援室、カリタスジャパン、仙台教区サポートセンター、また今回は全カリタスベースの主にベース長がオブザーバーとして出席）は、現地の状況を知るために、前日の 22 日のお昼から、カリタス南相馬所長の Sr.畠中千秋と副所長の南原摩利さんの案内で、現地見学に出かけました。南相馬市の小高区、浪江町の希望の牧場、請戸小学校、大平山霊園、富岡町の東京電力廃炉資料館、夜ノ森公園などを見て回りました。

【浪江町】フレコンバッグが破れ、中の汚染土が外に出てきているものもある

浪江仮設焼却施設　　富岡町、双葉町の除染で発生した可燃性廃棄物などの処理も行っている

23 日の午前、福島県内の小教区や修道会、また、関東からも活動グループの方々が原町教会の聖堂に集まりました。事前に行っていたアンケートに沿って、皆さんから活動の近況が報告されました。まずその内容をご紹介します。

◇原町教会　コンコルディア

４人のメンバーで、南相馬市原町区の３か所、小高区の１か所で手芸を通して被災者との関わりを続けている。身近なところで被災者の噂や悪口などを聞くことがあり、地元に住む自分たちが関わることの難しさがあると感じる。

原発の問題を福島だけのものにしてはいけない。除染廃棄物を常磐道の工事のために再利用するという計画があるが、道が横断する小高区の方々にとっては、復興に向けて動いているところに冷や水を浴びせることになる。弱い者いじめのように見える。

◇NPO 法人　福島やさい畑～復興プロジェクト～

福島県内 30 軒の農家、加工品のお店の商品を買い取り、関東での販売を続けている。9 年目になっても、販売先は 1 軒も減っていない。「福島のためになにかしたい」という思いを持った方が少なからずいるのだと感じる。

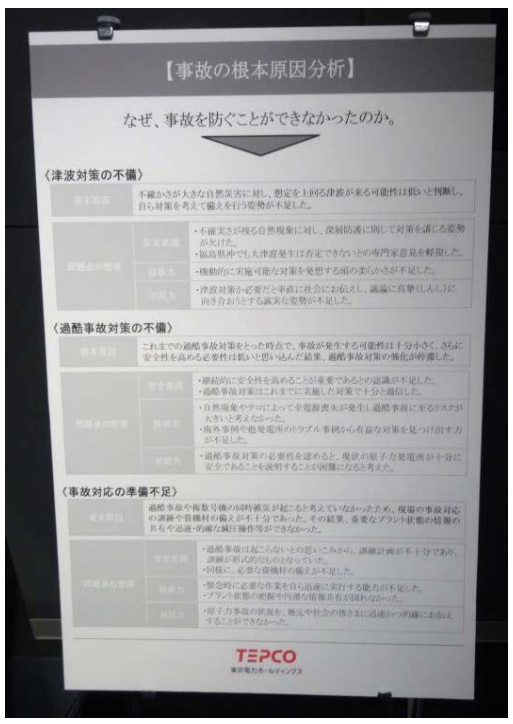
福島の農家は、震災前と比べて、2 割の客が戻っていない。2011 年に「福島産の物は食べない」と決めた人は、8 年経った今も食べない。また、卸業者が「福島産の物は売れないだろう」と思いこみ、安く買いたたいている。福島県では人口が減少しており、高齢化が進むことで、消費量が減っている。農家の後継ぎがいないことも問題である。

生活困難者への野菜の配布やフードバンク活動も行っている。現在、福島からの避難者は県内外で４万２千人といわれているが、その他にも「隠れ避難者」がいる。避難先で家を購入したり、復興住宅へ入居した人は避難者としてカウントされないが、本心では故郷に戻りたいと考えている、気持ちの上では避難者である。

◇きらきら星ネット

首都圏や山形へ自主避難してこられた方への支援を続けている。年月の経過とともに避難しておられる方々の状況がそれぞれ変わってきており、支援も個別化している。

活動のひとつとして原発被害裁判の支援がある。今、全国で原告は１万２千人いる。裁判の傍聴に人が集まらない、とお話ししたところ、福岡の大名町教会が協力してくださり、110 人入る傍聴席に 109 人が入った。カトリックのネットワークの素晴らしさを感じた。



【富岡町】　東京電力廃炉資料館　（元のエネルギー館を流用して作られた）

◇野田町教会　サラの会

相馬市役所との連携で、相馬市の井戸端長屋へ月に 1 回訪問し、アロマテラピーのハンドトリートメントや足湯などを行っている。復興の度合いは地域差、個人差があり、前向きに歩み出している人と癒されない傷を抱えている人とのギャップがますます広がっている。私たちは､向き合う方々お一人お一人と程よい距離感を持ちながら､｢支援｣というより「訪問」のつもりで通っている。

◇コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会

震災後、原発事故によって被災し、桜の聖母学院での学業継続が不可能になった生徒・学生のため、「ともしび会」を立ち上げ、毎月一人 8 万円の生活費の援助をしてきた。資金は全国や海外からの寄付。これまでの 8 年間に延べ 59 名の生徒・学生を支援している。

また、傾聴ボランティア講座を継続し、受講した人たちで「傾聴ボランティア さくら」を立ち上げ、施設での傾聴を行っている。震災と原発事故の後、私たちは人のために何かできたら良いと考えた。何かしなければ自らも立ち上がることができなかった。中通りに住む人の苦しみを共有し、絆が生まれた。現在、グループには 70 名が登録して活動している。講座は今も無料で開いている。

◇松木町教会　愛の支援グループ

浪江町から福島市の宮代仮設住宅を経て、南相馬市に移った方々へ会いに行った。お互いに心配し、元気でいることを確認した。直接訪問をすることを大事にしている。転居先の土地になじめず､「カリタスさんに会うとホッとする」と言ってくださって、去年亡くなった方もあった。一周忌にはカリタスの関係者が大勢招かれ、どれだけ慕ってくださっていたかと思う。お互いに元気になるために、今後も活動を続けていきたい。

福島県に住む人は皆被災者である。不安は変わらず、これからも私たちは不安を抱えて生きていく。自主避難をしている人たちの気持ちも分かる。風評被害を思うと、原発への不安を声を大にはできない。

菊地功大司教様のあいさつによりはじまったサポート会議

各団体からの報告

◇いわき教会

いわき市内の津波被災者を支援する「チーム平・堂根」は月 1 回、復興住宅での出張カフェを続けている。教会として原発被災者向けの活動も行いたいということで、今年の 5 月からスタートした。いわきサポートステーションもみの木閉所後も、さいたま教区サポートセンターが「(仮) カリタスいわき」として、さいたま教区の小教区とともに続けている復興住宅への出張カフェに、さいたま教区の小教区と同じ扱いでいわき教会も参加するようになった。いわき教会の中の限られたメンバーによる活動ではなく、教会の信徒全員が対象と考えている。いわき市には、津波被災者も原発避難者も両方いらっしゃる。必要とされるうちは、分け隔てなく活動していきたい。

◇郡山教会

郡山市内へ避難していた方々の仮設を支援していたが、富岡町や川内村へ帰還した方、郡山、福島へ移住した方がいる。個人的なつながりを、個人で続けており、年に一度、同窓会という形で交流会を開いている。川内村にカトリック教会が来てくれないか、場所は提供すると言われている。

教会としては、仮設住宅支援から郡山市内の貧困家庭の支援、そして外国人実習生の支援へシフトしている。外国人実習生からは、よく分からないうちに除染作業をさせられた、暴力を受けたなどの相談を受け、解決に向けて動いている。

個々の活動の状況のほか、支援のニーズが個別化しているという報告や、原発事故により生じた様々な分断に、私たちカトリック教会はあきらめず、つながりで対抗していこうという提言がありました。前日に見てきた帰還困難区域の様子を思い返しながら、新聞等で報じられる様々なデータの中に、一人一人の事情があることを思い、改めて原発事故がもたらしたものの重さを感じました。

【浪江町】請戸小学校（震災遺構に決定している）　希望の牧場

【富岡町】帰還困難区域はバリケードで立ち入りできないようになっている

午後は、会場をカリタス南相馬に移し、カリタスベーススタッフからの現況報告を含めた会議となりました。

この中で仙台教区は、復興支援活動の指針を示す「新しい創造」基本計画の第 5 期計画を発表しました。仙台教区としてはこれまでに、被災地の状況に合わせて 4 度、期間を区切って支援活動の計画を発表してきましたが、最終となる今回は、司教団が支援を表明している 2021 年 3 月以降を見据え、仙台教区全体でこの先も末長く取り組んでいくため、計画の期限を設けないこととしました。

計画の柱として、1. これからも教会の門を開き続けていきましょう　2. 原発事故は福島だけの問題ではありません。関心を持ち続け、行動をしましょう　3. ベース運営、および仙台教区サポートセンターは、資金面を含め、将来を見据えて被災地域のニーズに合わせて対応していきます　という 3 つを掲げています。

このうち 3 について、これまでの活動を支えているカリタスジャパンからの資金援助は、2021 年 3 月に終了することが決まっており、特にカリタスベースでは、これまでの活動をそのままに、2021 年 4 月以降も継続していくことは難しくなります。それぞれのカリタスベースでは、これまでともに歩んできた地域の方々の声を聞きながら、活動を整理し、続けていくべきことはどのようにしたら継続が可能になるか、検討が行われています。

岩手県の宮古ベースでは、宮古教会が主体となり、盛岡の三教会と連携しながら､地域の方に開かれた教会カフェの形を模索しています。

全ベースの中で最も早く法人化したカリタス釜石は、女性と子どもの支援や復興住宅でのコミュニティ形成支援などを積極的に行ってきました。初期の頃から継続しているサロン「ふぃりあ」は今後も継続を希望しています。大船渡ベースは、教会、カトリック幼稚園とも密接に関わりながら、サロン活動や滞日外国人支援を行ってきました。今後も地域の中で開かれた存在として、活動を継続していこうとしています。宮城県のカリタス南三陸は、漁業、農業支援を通して地域の方へ寄り添いを続けてきました。2019 年度中の法人化を目指しています。石巻ベースは、ベース 1 階を地域の方の集いの場として開放してきました。2021 年 4 月以降の運営については、今後も検討を続けていきます。福島県のカリタス南相馬は、地域の方々とともに活動を続けていこうと、今年春に一般社団法人として独立しました。サロンや屋外での片付け等の活動のほか､原発被災地の現状を学ぶ拠点として、今後ますます存在の重要性が高まっていくでしょう。さいたま教区によるいわきサポートステーション「もみの木」は、2018 年春に閉所しましたが、その後もさいたま教区、いわき教会、聖母訪問会楢葉修道院が協働し、原発周辺地域からいわき市へ避難している方々への出張カフェを続けています。仙台教区サポートセンターについては、教区の中でどのような体制を保っていくか、検討を続けていきます。

次回の仙台教区サポート会議は 2020 年 1 月に開催することを確認し、第 51 回サポート会議は終了しました。

午後からカリタス南相馬で行われたサポート会議・全ベース会議の様子

カリタスいわきの活動報告

カトリックいわき教会　石井キヌ/佐藤賢二

「カリタスいわき(仮称)」(以下、「仮称」を省略)の活動を報告するにあたり、まずもって、「カリタスいわき」をご説明しなければなりません。

2011 年 3 月、東日本大震災という未曾有の自然災害とそれに続く東京電力福島第一原子力発電所の電源喪失による原子力災害が発生しました。これにより、特に福島県双葉郡を中心とした浜通りの多くの住民は、二重の災難を被ることとなり、まさに「着の身着のまま」の避難生活を余儀なくされることになりました。

このような中、放射線量が比較的低く、浜通り南部に位置するいわき市には、多くの被災者用仮設住宅が用意され、双葉郡の多くの方が生活することになりました。

いわき市内の仮設住宅には、津波によって家族や家を失われた方々と放射能汚染によって故郷を追われた方々が、ごく近くで生活することになったのでした。

読者の皆さんは既にご承知のことと思いますが、日本のカトリック教会は、オールジャパンの体制で、被災地、被災者を支援してくださいました。そして、いわき市内に「もみの木」という拠点を置いて支援活動に入ってくださったさいたま教区の方々は、もみの木での活動展開のほか、いわき市内にある原発災害を受けた方々の仮設住宅での支援活動を展開されました。一方、いわき教会としても被災者支援活動を立ち上げ、津波による被害で仮設住宅に住まわれているいわき市民の支援にあたってきました。

発災後 7 年の時が過ぎ、2018 年 3 月になると復興公営住宅団地の整備に併せ、原則的に仮設住宅の供用が終了することになり、多くの仮設住宅が整理されました。このことから、さいたま教区の活動拠点であった「もみの木」も閉所しましたが、復興団地の自治会からは、出張カフェによる訪問活動の継続を求められていました。

そこで、さいたま教区から、「もみの木」という名称ではなく、いわき市内にある復興団地への訪問活動をいわき教会と共に展開する形を目指したいとの話がありました。また、いわき教会としても、教会内で複数の福祉的活動を行っているグループの一本化を議論しており、その中でさいたま教区が目指す復興団地への訪問活動に賛同することになりました。

団体名を「カリタスいわき(仮称)」として当面は、復興団地２カ所を、さいたま教区のボランティア、いわき教会有志、さらに聖母訪問会楢葉修道院のシスター方によって訪問するという活動を継続してきました。

訪問している復興団地の一つは北好間団地といって、地上３階建ての鉄筋コンクリート造の住宅団地で、16 棟 323 戸が用意されています。住民は、現在も帰還困難区域が残っている浪江町、双葉町、大熊町、富岡町の４町の皆さんが中心です。こちらは、いくつもの仮設住宅から転居された４町の皆さんが住まわれているので、関わっている役場や社協などもそれぞれバラバラです。ですから、自治会立ち上げやコミュニティ形成が容易ではなく、福島県から委託されているＮＰＯ団体が自治会支援にあたっています。このような時に、私たちのように４町と均等距離でかかわれる「よそ者」のカフェ開催は役に立っています。

北好間団地　恒例の手作り歓迎掲示板

朝尾さんの解説付ＣＤと一緒に歌う

もう一つの訪問先は、下矢田団地という鉄筋コンクリート造の５階建て１棟・50 戸の復興住宅で、大熊町の方々が住まわれています。こちらも同様な面はありますが、ほとんどの方が大熊町民である点が少し違います。

そして、2019 年 5 月 13 日、14 日は、いわき教会が組織として認められた初めてのカフェでした。それまで、お手伝いの形でボランティアとして参加させていただいており、勝手は知っていたつもりでしたが、一抹の不安を抱えてのスタートでした。

一日目、13 日の北好間カフェでは、20 人弱の方々が集まってくださいました。定番の本格的な挽きたてドリップコーヒーとさいたま教区の信徒の方の手作りのケーキを振る舞い、しばらくの談笑の後、さいたま教区の朝尾さんが用意してくださった、アコーディオン奏者で寄席芸人の舞台を録音したＣＤの歌や伴奏に合わせ、懐かしい歌の数々を皆さんで大きな声で歌い、何とかカフェを終えることが出来ました。

二日目、14 日の下矢田団地カフェでは、15 人ほどの皆さんが集まってくださいました。コーヒーとケーキをいただいた後、メンバーにギターを弾くいわき教会の信徒が加わり、ギター演奏とギターの伴奏による懐かしい歌を歌いました。「生の伴奏はやっぱり良いネ…」との評価をいただき、終了となりました。

次回のいわき教会が担当する日には、もう少し計画を密にして、集会所に集まる方々に「今日来てよかった」と思っていただけるような支援を心掛けたいと思います。

いわき教会で複数の福祉的活動を行っているグループの一本化は道半ばです。いわき教会一体で、いわきに住む津波被災者と原発事故の放射能汚染で故郷に戻れない被災者に対し、分け隔てなく支援活動できる環境作りに努力したいと思っています。

ギター伴奏つきの合唱は好評でした

東北ボランティアに行って

東京純心女子高等学校

８月４日から８月８日まで、実際に被害があった地域で活動をし、人と人とのつながりを強く意識した体験となりました。自分自身、東北地方を訪れ、ボランティアとして活動するということが初めてで、不安でいっぱいでしたが、実際はとても楽しく充実した時間を過ごさせていただきました。

ボランティアとして活動した３日間のうち２日間は、農工房で農作業のお手伝いと障がい児の見守り施設で開かれていたお祭りのお手伝いをさせていただきました。農工房の牧草地からは、震災なんてなかったんじゃないかと思ってしまうような美しい景色が広がっており、２カ所とも心があたたまるような素晴らしい体験でした。

障がい児見守り施設のお祭り

震災遺構見学

１日目が農工房、２日目は震災遺構見学、３日目に障がい児施設という日程だったのですが、２日目の震災遺構見学は、とても記憶に残るものでした。言葉にすることができずにただただ涙しか出てこない映像、「ここに行けば助かった」は、結果が分かる“今”だからこそ言える言葉だと実感させられたお話、いまだに自分の中で整理がつかない、言葉を失う量の瓦礫。そのどれもが、私に震災を忘れてはいけないと強く思わせるものでした。

震災いう過去を背負った東北の地には、これからを懸命に生きていくという覚悟と力強さを感じました。ボランティアとして来た身ですが、生きていく勇気をたくさんもらいました。東日本大震災を忘れないために語り継ぎながら、未来のために前向きに進んでいる人、頑張っている人がいる今の東北が、私は好きです。来てよかった。
また機会があれば行きたいと思います。　　高校１年　粟本穂香

農工房でのお手伝い

昨年の夏に引き続き、２回目のボランティアだった。２回目ということもあり、活動場所が昨年と同じになることがあった。しかし、１年越しに行くから見えることもあり、昨年とはまた違った東北を見ることができた。

特にそのことを強く感じたのは、漁師の C さんのところで活動した時だった。C さんとは昨年、一緒に活動していた他の学校の方々とともに、純心や他校についてのお話をしたり、少しだけ震災のお話を聞かせていただいた。しかし、今年の C さんのお話は、楽しいお話だけでなく、考えさせられるようなお話もあった。C さんは「東日本大震災があったから、こうしてたくさんの人たちに会えた。亡くなった方たちには申し訳ないが、私は震災があって良かったと思っている。もう前を向かなければいけない」と言っていた。やはり震災は、大切な人や思い出の場所、家、学校…とたくさんの人やものを失う。誰が見てもよいものとは言えない。しかし、昨年の C さんはこのお話をしていなかった。この１年で私たちには想像もつかないような苦しみを乗り越えて“良かった”という言葉にたどり着いたのだと思う。ここまで来るのに８年もの歳月がかかり、まだ完全に心の整理がついたわけではないと思う。少しずつ前に進んでいっている東北の方の姿が見えた。私は大切な人を失った経験はなく、心の整理をするのにどれだけ大変なことかも分からない。しかし、心の整理をつけるのに８年もの時間が必要だったというところからも、震災が被災地の方々の心に、どれだけ深い爪痕を残したのかが分かった。

このように１年間という時間の中で、被災地の方々の心の変化を知ることができた。東北、そして東北の方々は C さんの言葉にもあったように前を向いていた。ゆっくりであるため、まだまだ時間はかかるが復興が進んでいることを感じた。　　高校２年　横山あかり